平成１４年度卒業論文

トルコの油相撲

―その歴史と文化的位置づけ

学籍番号８５９９１３７号
南・西アジア課程
トルコ語科
高井博子

章別構成

はじめに

第一章　油相撲の歴史的な位置づけ

第一節　諸地域における相撲
第二節　遊牧民のスポーツ
第三節　トルコ民族の相撲 Karakuçak Güreş
第四節　ギリシアの相撲と油相撲 Yağlı Güreş
第五節　オスマン朝における相撲

第二章　スポーツとしての側面からみる油相撲

第一節　試合が始まるまでの流れ
第二節　ユニフォーム kısbet
第三節　勝敗を決するルールと技
第四節　Kırkpınar における油相撲大会

おわりに

はじめに

油相撲（トルコ語ではヤール・ギュレシュ Yağlı Güreş、身体に油（yağ）を塗って行う相撲・レスリング（Güreş）の意）は何世紀にも渡りトルコ民族に愛好・伝承されてきた伝統的なスポーツである。（図１）

牧草地のような広大な草原をリングとし、黒い牛皮製のタイツを身に纏い、全身にオリーブ油を塗ったレスラー達が、互いの力がつきるまで勇猛果敢に相撲を繰り広げる。武器となるのは互いの鍛え上げられた肉体だけであり、闘いの勝者には名誉と共に財産となる家畜、賞金や黄金のベルトなど多大な報酬が与えられる。

かつてトルコ系の人々が遊牧民として草原を家畜と共に移動して暮らしていた時代から、相撲は子供同士の遊びや結婚式などの宴会の余興、つまり一種の娯楽として、あるいは絶え間ない部族間や異民族との抗争に備えた身体的教育の一環として、彼等の生活に積極的に取り入れられてきた。

やがてオスマン帝国の台頭とその支配が進行し、人々の定住化および西洋で獲得した新しい領土への移住がさかんになるにつれ、相撲のスタイルもまた新たな変遷を辿ることになる。ギリシア人の間で行われていたレスリングの影響を受けて、身体にオリーブ油を塗ってから相撲を取るようになったのである。

それまでは禁止事項であった油を塗るという行為によって、レスラー達の身体は滑りやすくなり相撲を組み合う際には身体的条件のほかにも彼ら自身のテクニックが問われるようになった。よってそれまでは能力差や体格差などである程度勝敗が予想されていたトルコの相撲は、観客をより愉しませるものとなったのである。

本論は、油相撲をその歴史と文化的位置づけから分析し、また日本においてはいまだマイナーな競技であるこのスポーツを研究するものである。しかし残念なことに、例外として Özbay Güven らの研究が[1]あるものの、トルコでは現在までこのスポーツに関する本格的な研究はほとんど行われていない。

さらにレスリング・相撲などの素手で行う格闘技を扱う研究においては、ギリシアの古代オリンピックに端を発し、中世に一度衰退

---

[1] Özbay Güven,"Türklerde Spor Kültürü",Atatürk kültür,dil ve tatih yüksek kurumu Atatürk kültür merkezi yayınlar sayı:57,Ankara,1992
Özbay Güven,Osman Dalaman ve Dursun Ayan,"Osmanlı Devletin'de Güreşin Kurumlaşması Üzerıne Bazı Düşünceler",Alaadin Akoz bayram Ürekli Ruhi Özcan(haz.) Uluslararaı Kuruluşunun 100 Yıl Döneminde Bütün Yönleriyle Osmanlı Devleti Kongresi,Konya,2000

を見せたものの近代オリンピックにおいて再びさかんになったとするヨーロッパ寄りの研究[2]が中心であり、中世におけるアジア・中近東地域で行われてきた相撲の研究は主流ではないのが現状である。

このため本論では主な資料としてアカデミックな立場で書かれた著作ではないものの、現在もトルコの一都市エディルネのクルクプナルで毎年開催されている油相撲の大会委員長（Kırkpınar Ağa）を務めた、Alper Yazoğlu[3]氏の個人的な回想録を使用した。

第一章　油相撲の歴史的な位置づけ

第一節　諸地域における相撲

相撲とは二人の人間が押し合い、突き合い、組み合って、力技によって行う個人競技の一種と定義される。日本では国技たる相撲や柔道と区別するため、レスリングという用語を格闘競技の一種類として扱うが、レスリングは古代英語で「ひねる」「組討ち競技」などの意味を持つことばであり、相撲と起源を同じとするスポーツである[4]。このため本論ではこれらのスポーツを相撲と総称する。

当然のことながら相撲に類するスポーツは、トルコ系の人々だけでなく世界各地で古代から行われていた。ここでは世界の諸地域で行われてきた相撲を紹介する。なお、油相撲の形成に大きく影響を与えたと考えられるギリシアの相撲に関しては後述する。

モンゴルではパリルドポと呼ばれるモンゴル相撲（図２）が 13 世紀のチンギス・ハン時代からすでに広く普及しており、国家的な大会や集落の祭りなどで楽しまれている。服装は短めのブーツと半ズボン、上半身には色鮮やかな刺繍や装飾を施した半袖のチョッキ・ジドックを纏った上、背中にたすきをかける。

柔道のように襟や袖をつかんで投げたり、脚を絡ませたり、組み付いて蹴り合ったりするが、広い草原で行うために細かい技が無い。勝敗はひざから上が地面に付けば負けであり、勝者は草原を跳ね回って勝利を誇示する[5]。

---

[2] 『最新スポーツ大事典』正編、大修館書店、1987 年、p.1350-1

[3] Alper Yazoğlu(1948~)　1991,92 年に Kırkpınar Ağa に就任。本論は彼の著書 Balkanlarda Türk Yağlı güreşleri Kırkpınar 1 を参考にしている。

[4] 『日本大百科全書』第 24 巻、小学館、1988 年、p.377

[5] 『日本大百科全書』第 22 巻、小学館、1988 年、p.820

日本においても俵で円形に築いた土俵の中で、裸に回しをしめた力士が二人、素手で押し合いや出し合いをして勝敗を争う。職業相撲とアマチュア相撲の二つの他にも神社に伝わる儀礼的な神事相撲、祭礼に行われる奉納相撲、子供相撲、農・漁村や地方都市における草相撲などが行われてきた。[6]

インドではクショテーと呼ばれるインド相撲が古代から全国的に行われ、インドの国技とされていたが、現在ではボンベイと東部のオリッサ周辺でさかんに行われている。
競技ルールは四メートル四方の砂地のリングで相手を投げ倒し、仰向けにして押さえ込み、背中または両肩を地面に付けると勝ちになる。勝負は三番勝負によって決められ、年一回の大会に備えてインド各地に道場でレスラーが養成されている[7]。

後述するトルコ系の人々の伝統的な相撲であるカラクチャック・ギュレシュ（Karakuçak Güreş）や油相撲との共通点が非常に多いのはイランの相撲コシュティ（図３）である。その普及にはズールハーネ（ペルシア語で「力の家」）という徒手体操や弓、剣、盾などを模した器具による、若者から老人、一般庶民から軍人まで様々な男子の鍛錬の総仕上げとして相撲の稽古を行う道場の存在が欠かせない。
ズールハーネでは高位のレスラーであるパフラヴァーンによる指導のもとで鍛錬が行われ、モルシェド（精神的指導者の意）と呼ばれる人物が太鼓（ザルブ）とゼング（鐘）を操り、『王書』や『薔薇園』などのペルシアの英雄叙事詩や抒情詩を朗唱して鍛錬の進行やリズムを司る[8]。レスラー達はゴウドと呼ばれるプール状の土俵で組み合い、いずれかの背中が地面に付くと勝敗が決まるが、レフェリーは特に決まっておらず周囲で観戦するレスラー達が審判（ダーバル）として判断する[9]。また、普段の鍛錬ではズボンの上から赤い布を褌状に巻きつけたものを身に付けるが、トニケェと呼ばれるタイツ状のズボンを履くこともある[10]。

第二節　遊牧民のスポーツ

---

[6] 『日本大百科全書』第 13 巻、小学館、1987 年、p.202
[7] 『日本大百科全書』第 2 巻、小学館、1985 年、p.824
[8] 寒川恒夫、『相撲の人類学』、大修館書店、1995 年、pp.102-7
[9] 寒川、前掲書、p.119
[10] 寒川、前掲書、p.107

油相撲がどのようなスポーツであるかを説明するためには、まずその原型である相撲がトルコ人にどのような形でなされてきたかを説明する必要がある。

中央アジアから西へと草原を、家畜と共に移動しながら生活してきた、オグズ族、セルジューク朝、オスマン朝などに代表されるトルコ系の遊牧民の人々は、常に厳しい自然環境の中で生き抜くために、または領土をめぐり絶え間ない部族間や異民族との戦闘に備えて、身体の頑強な、あるいは熟達した戦闘技術を持った遊牧民戦士を育成しなければならなかった。

そのため相撲（güreş）や狩猟（avcılık）（図４）、弓による射撃（atcılık）や馬術（bincilik）、剣術（kılıç）や鎚鉾（gürz）、馬に乗って向かい合わせに短い槍を投げあうジリット（cirit）（図５）、徒競走（yaya koşular）などの習得すれば確実に実生活に生かせるスポーツが子供の教育の中に積極的に取り入れられたのである[11]。

中でも相撲が強いレスラーや弓を的確に射られる狩人へと成長を遂げた者は、戦闘においてその実力を大いに発揮し、人々から英雄（Alp）、力持ち・勇者（Pehlivan[12]）として賞賛され、彼等の活躍は伝説や叙事詩となって現在まで伝えられている[13]。

相撲をとるレスラー達の鍛え上げられた腕や脚にみられる力強さ、大きく逞しい肉体、そしてそこに宿る敵を恐れない勇敢で大胆な精神は、そのまま彼等の属する集団のシンボルとしてみなされ、すぐれたレスラーであること（Pehlivanlık）は人々に敬意を抱かせる結果となったのである。

第三節　トルコ民族の相撲 Karakuçak Güreş[14]

トルコにおいて相撲と一口に言っても、時代の変遷や地方によって様々なスタイルで人々に楽しまれてきた。

トルコの南東部ハタイ・ガズィアンテップ地方で発達したアバ（Aba）と呼ばれるフェルト製の短いマントを着て相撲を取る“アバ・ギュレシュ”や、服を着たまま行うクリミア地方に住むトルコ人達の相撲、シャルヴァル（Şalvar）と呼ばれるもんぺのようなズボンを履いて腰を下ろし、脚だけで相撲を取る“シャルヴァル・ギ

---

[11] Âtıf Kahraman,Osmanlı Devleti'nde Spor,Ankara,1995,p.108
[12] Pehlivan　pehlivanはペルシャ語起源の単語であり、相撲を取る「レスラー・力士」の意味も持つ。
[13] Güven,Dalaman ve Ayan,op.cit.,pp.321-2
[14] Güven,op.cit.,p.12

ュレシュ”などの相撲が存在するが、中でも代表的なのが本論で取り上げいる油相撲とカラクチャック・ギュレシュ（Karakuçak Güreş）の二つである。

油相撲はこのカラクチャック・ギュレシュが、のちにオスマン朝のヨーロッパへの拡大に伴って発展した形の相撲である。油相撲のスタイルが完成される経緯をたどるためにここではこの相撲について取り上げるものである。

カラクチャック・ギュレシュは中国北東部、ヤクート、アゼルバイジャン、トルキスタン、カザックやタタールなどに住むトルコ系遊牧民族の人々に広く愛されてきた相撲のスタイルを継承するものであり、自由形相撲（Serbest Güreş）とも称される。

カラ（kara）はトルコ語で「黒」を意味し、この色には力や強さがあるとされている。これと「英雄・若者」を表す koçak という単語を合体させた結果「浅黒く逞しい（kara）若者（koçak）が取る相撲（Güreş)」という複合語が生まれたとされる。

カラクチャック・ギュレシュにおいてレスラーは、プルプット（pırpıt）と呼ばれる山羊の毛や麻で織られたズボンを履き、年齢や力の強さ、相撲の熟達度によって６つの等級（boy）に区分された上で相撲を取る。

ルールはいたって簡単であり、技をかけて相手を地面に転がしたり空中に放り投げたりして、相手がへそが上を向いた状態になることで勝利となるのである。なかなか決着がつかない場合でも、どちらかが降参するまで試合が続けられた。

またこのカラクチャック・ギュレシュは、農村の結婚式の宴席で大会が催されることが多かった。相撲と音楽のない婚礼は婚礼とみなされず、相撲大会の規模はそのまま婚礼の主催者の富裕をあらわすものになるため、遠方の村や都市から選手を募るために馬やラクダ、山羊や牛などの家畜、絹織物や綿織物、刺繍の施されたショールやハンカチなど豪華な賞品が用意されたのである[15]。

第四節　ギリシアの相撲と油相撲 Yağlı Güreş

ヤール・ギュレシュ、油相撲は第三節でも述べたようにカラクチャック・ギュレシュのスタイルを継承しつつ、「油を塗る」という行

[15] Güven,Dalaman ve Ayan,op.cit.,p.325

為[16]により、スポーツとしてより高度に発展した相撲である。

なぜトルコ系の人々が相撲を取る際に油を塗るようになったのかは、一説ではオスマン朝の領土拡大がバルカン半島に及ぶようになった結果、古代オリンピックでも正式競技であり、古代ギリシアから伝統的に愛好されていた相撲やパンクラス（pankraas）・パンクラチオンとよばれる、相撲とボクシングを合成したような競技からの影響が考えられる[17]。

古代ギリシアにおいて相撲はパライストラと呼ばれる学校で少年のころからトレーナーによる厳しい指導が続けられ、相手をきれいな投げ方で投げるのが目的の「直技（直立）の相撲」と一人が負けを認めるまでグラウンドで試合が続行された「寝技の相撲」の二つに区別されており、前者が相撲（レスリング）と呼ばれたのに対し後者はパンクラチオンと呼ばれた。[18]（図６）

古代ギリシアの相撲は砂地のリングでトーナメント形式で行われ、相手を三回地面に叩き付けることで勝ちとみなされる競技であった。時間制限や体重制限、寝技は無く、勝つためには胴や腰、背中、あるいは肩のどの部分でも三回地面に付けることが必要であった[19]。またこの競技においては一番重要なことは気品とスタイルであった。

パンクラチオンもトーナメント形式で行われたが、砂地のリングには水を含ませて泥状にしてあった。泥によって身体が滑りやすくなり、つかみにくくする効果があったとされる。

またパンクラチオンでは立ち技と寝技が併用され、相手を倒すためならば噛み付きと目や耳や鼻などの部位をえぐる行為以外はどのような方法でも許されていたので、上述の相撲では許されない、例えば自ら後方に倒れる技や殴る、蹴る、飛び掛る、関節技、窒息技などの、時には競技中に死者が出るほどの冒険的な型が訓練されたのである[20]。

そして、バルカン地方では古代からエーゲ海沿岸で栽培されていたオリーブから精製された油を裸体に塗って、相撲をはじめとする

---

[16] なおカラクチャック・ギュレシュでは、身体に油を塗って相撲を取ることは規則によって禁止されている。
[17] Güven,op.cit.,p.15、『日本大百科全書』第４巻、小学館、1988年、p.420
[18] E.N.ガーディナー、『ギリシアの運動競技』、プレスギムナスチカ、1981年、p.204
[19] E.N.ガーディナー、前掲書、p.204-8
[20] 『最新スポーツ大事典』正編、大修館書店、1987年、p.1351

スポーツが楽しまれていたのである。練習や競技の前後に、注意深く油を身体に擦り込むことでマッサージをしていたと考えられる[21]。
また油を塗った肌はレスラーの肉体をより力強く精悍に見せるだけでなく非常に滑りやすくなり、相撲を取る上で相手と組み合ったり相手を放り投げたりすることに非常にテクニックが要求されるようになったのである。
それまでは腕力に頼るばかりであったカラクチャック・ギュレシュに比べて、油相撲ではより相撲の勝敗は予想が付きにくくなり、観客の興奮や熱情を煽った。

これらの結果カラクチャック・ギュレシュはギリシアの伝統的な相撲やパンクラチオンからの影響によってスポーツとしてより複雑に洗練された形、すなわちヤール・ギュレシュへと進化を遂げることになったのである[22]。

また、試合の際にはクスベット（kısbet）と呼ばれる牛革製のズボンを履く点や、試合の前にジャズグル（cazgır）と呼ばれる祈祷師が祈祷や選手の紹介や彼等をたたえる詩を朗読する点、ルールや等級の区分がより細分化された点、結婚式の他にもギリシアやローマ帝国時代からの伝統にのっとって定期市や縁日でも見世物として興行されるようになった点でも油相撲はカラクチャック・ギュレシュとは異なる。

第五節　オスマン朝における相撲

オスマン朝の時代においても相撲は依然として男子の教育に取り入れられてきた。１４世紀半ばにはスルタンやイスラム神秘主義集団の長（Şeyh）の援助を受け、相撲の保護と普及のために相撲道場（Güreşçiler tekkesi）が首都ブルサに、1360年の首都移転に伴いエディルネへ二番目の道場が建てられた。レスラー達はその類稀な身体能力を武器にリングばかりでなく戦場でも活躍し、歴代のスルタンに重く用いられてきたのである[23]。
また相撲は一種の娯楽や余興として、定期市や結婚式や割礼式の宴席でもさかんに行なわれてきた伝統も持っている。

---

[21] E.N.ガーディナー、『ギリシアの運動競技』、プレスギムナスチカ、1981年、p.88
[22] Güven,op.cit.,p.15
[23] Güven,op.cit.,pp.8-12

また、オスマン朝時代にイスタンブールは相撲の中心地ではなかったが様々な場所に作られた pehlivan tekkeleri がこのスポーツの重要な中心地となっていた[24]。Evliya Çerebi はこの tekke に対して旅行記でよく言及し[25]、イスタンブールで毎年行われていたギルドのパレードにおいて剣士や猟師たちと同様にレスラー達は相撲を取りながら行進したということを記している[26]。（図７～図１０）

Evliya Çerebi の記述によればこの時代の最も有名な pehlivan tekkeleri は Küçük Pazar という場所にある Şüca Tekkesi と Zeyrek 坂にある Demir Tekkesi であった[27]。これらの tekke がメフメット二世によって１５世紀に開かれ 1800 年ごろまで活動していたことが知られている。しかしマフムード二世が 1826 年にイェニチェリを廃止した際、ベクタシュ教団の tekke と一緒にこれらの tekke も閉鎖されてしまった。

だがマフムード二世はレスラーを保護し相撲を愛したレスラースルタンでもあった。Ahıskalı Mahmud Pehlivan や İkiz Osman や Bursa'lı Mehmed Pehlivan のようなレスラー達が保護され、マフムード二世の前で御前試合を行ったことが知られている。イスタンブールの Ok Meydan にある Yeni Bahçe Çayır（牧草地）、スレイマニエ・モスクの東の空き地、Yeni Kapı 付近、Koca Mustafa Paşa と Yedikıre の空き地、Kadırga や Kağıthane で相撲は行われていた。

マフムード二世の息子であるアブデュルアズィズ（在位 1861-1876）も相撲好きのスルタンであり、即位の際には Yozgatlı Hasan Pehlivan をはじめ何人かのレスラーを引き連れ、Ihlamur に Saya Ocağı と呼ばれている施設を作りそこを道場として相撲を行わせていた[28]。

しかしアブデュルアズィズ以降のスルタン達はあまり相撲に興味を示さなかったため、レスラー達は徐々に経済的な理由に直面してイスタンブール以外の、あるいは外国への地方巡業に出かけていたようである[29]。

第二章　スポーツとしての側面からみる油相撲

---

[24] Dünden Bugüne İstanbul Ansiklopedesi,clit3,İstanbul,1994,pp,454-5
[25] Güven,Dalaman ve Ayan,op.cit.,p.324
[26] Narrative of travels in Europe, Asia, and Africa, in the seventeenth century, by Evliya Efendi, translated by Joseph von Hammer, London, 1834,rep.1968, p.197
[27] Kahraman,op.cit.,p.190
[28] Yazoğlu, op.cit.,pp.110-120
[29] Kahraman,op.cit.,p.140

第一節　試合が始まるまでの流れ

この章ではこの油相撲のより詳しい形態を、実際の試合の流れや技、禁止事項を含めたルールの説明などを交えながら分析していく。

油相撲は単にレスラー達がリングに集まって相撲を取るだけの競技ではない。試合を始める前には選手の名を読み上げて祈りを捧げる祈祷師ジャズグル（cazgır）や、大太鼓（davul）・笛（zurna）が鳴り響く中、レスラー達のウォーミングアップを兼ねたパフォーマンスが行われ、観客の目を楽しませるのである[30]。（図１１・図１２）

試合が始まるまでの流れは非常に儀式的であり、またレスラー達の士気を鼓舞すると同時に、これから始まる壮絶な戦いの空気の中に観客を引き込む効果があると考えられる。

まず祈祷師が祈り（dua）を読み上げると、それを合図にレスラー達はペアになって草原に設営されたリングに入場してくる。そして彼らは草地のリングに立つと準備体操（peşrev）を始めるのである。この体操は大太鼓（davul）の奏でるリズムに合わせて身体全体の筋肉をほぐすストレッチのほかに、鷲の翼のように両腕を大きく広げてばたつかせたり、地面から巨体を揺るがせてジャンプを繰り返したりして、ウォーミングアップと同時に自分の力を他のレスラー達や観客に向けて誇示するパフォーマンスの役割も果たす。

準備体操を終えたレスラーはそれぞれ、自分の対戦相手になるであろうレスラーを選んで背中合わせにリングに立ち、反対方向に歩き出す。リングの中を堂々と大きく腕を振りながら歩き、十数歩ほど歩いた地点でひざを付き、また立ち上がって相手に向かっていく。

擦れ違う瞬間にお互いの肩や腕、口元などに、いとまごいをしあうように、あるいは互いを挑発し合うように触れ合うのである。そしてニ、三回このような動作を繰り返した後にがっちりと組み合い、試合を始めるのである。

なおヤール・ギュレシュではカラクチャック・ギュレシュと同様に、年齢や力の強さ、相撲の熟達度によって一番下から ön ayak、ayak、orta、baş と剣の切っ先（baş）から塚（deste）までをみたてた等級があり、さらに各等級でも２～３の等級に分かれるため、合計９つの等級（boy）に区分された上で相撲を取る[31]。等級によっ

---

[30] Yazoğlu, op.cit.,p.62

[31] Yazoğlu, op.cit.,p.72、Güven,Dalaman ve Ayan,op.cit.,p.326

て祈祷師の読み上げる祈りの内容や長さ[32]、獲得賞金額[33]が異なる。

第二節　ユニフォーム kısbet

ヤール・ギュレシュの際にレスラーが身につけるユニフォームはクスベット（kısbet、トルコ語で「腰から下に着るもの」を意味する）と呼ばれる、雄の小牛や山羊、水牛の皮で出来たタイツ状のズボンのみである。

上質で厚手の皮は職人の手でしっかりと縫製され、腰から下の部位を保護すると同時に、脚部をぴったりと締め付け、レスラーの身体をより力強く見せる効果も持っている。負担のかかるひざやすねの周辺の生地にはフェルトが裏あてされており、腰まわりにはレスラー一人一人の身体に合わせて調節できるように紐が通されている。装飾としては飾り鋲やレスラーの名前が刺繍される場合が多い[34]。

また第一章で取り上げたカラクチャック・ギュレシュでレスラーが身に付けるプルプット（pırpıt）もヤール・ギュレシュにおいて履くことが許可されている。

このクスベットを履くことは一人前のレスラーであることの証であり、大変名誉なこととされる。若い見習いのレスラーが初めてこのズボンを履くには師匠（usta）の許可が必要であり、その際には親族や有名な元レスラー、観客を集めて儀式が開かれるのである。[35]

この儀式にはイスラム教の影響が強くみられる。場に集まったレスラーたちの一人が、叙事詩において相撲の開祖であるとされる Haziret Hamza[36]の魂にコーランの最初の章（Fatiha）を朗読し、若い見習いレスラーはクスベットを履く際に「慈悲深きアラーの名において」と念仏を唱えてその腰まわりにキスをしてから身につける。レスラーはオリーブ油や薔薇の花びらで香り付けされた水をかけられることによって身体を清められる。そして見習いのレスラーは師匠や先輩の大物レスラーの腕にキスをすることで彼等に対する敬意を示し、その場の来客へのもてなしも兼ねて同輩のレスラーと相撲を取るのである。

---

32 Yazoğlu, op.cit.,p.77
33 Yazoğlu, op.cit.,p.173
34 Yazoğlu, op.cit.,p.67、Güven,Dalaman ve Ayan,op.cit.,p.327
35 Güven,Dalaman ve Ayan,op.cit.,p.329
36 Yazoğlu, op.cit.,p.55

第三節　勝敗を決するルールと技[37]

ヤール・ギュレシュにおける勝敗は審判の鳴らす笛によって決定される。第一節で述べた等級ごとに総当り戦を行い、最後に残った選手がチャンピオンとなる。原則として引き分けはなく、どちらかが地面に押さえ付けられるか、一定時間地面から持ち上げられてしまうか、降参するまで試合は続けられる。

原則として審判の判断に選手は従わなければならない。また試合中に選手の体調が著しく損なわれ、試合の続行が不可能だと審判が判断した場合にはドクター・ストップとして 10 分程度の休憩と処置を施すというルールも現代では適応されている。

ルールでは相手を次にあげる状態のうちどれかに陥れれば、相手に勝つことができる。

1）　相手の両腕を地面に押し付け、地面に対して腕がつっかえ棒のような状態になるようにする。
2）　相手を仰向けに転がして、ひじのどちらか片方が地面につく状態にする。
3）　相手の身体を完全に地面から持ち上げた状態で三歩以上歩く。なおその際、持ち上げられたレスラーの脚が持ち上げているレスラーの脚に触れていないことが条件である。
4）　片方の腕が地面に付いた状態で、別の腕を取って相手を地面にひっくり返す。

また、試合中の禁止事項としては以下のような点が上げられる。

1）　相撲を取り合う前に行う、腕を羽のように動かす動作をわざと長引かせて、長時間相手を待たせてはならない。
2）　相手の身体を地面に押し付ける際に過度の圧迫をしない。腰まわりをひじで圧迫しない。
3）　無理矢理に相手のひざをねじってはならない。
4）　ズボンで保護されていないすねの部位を叩かない。
5）　目・耳・鼻を指で突いてはならない。
6）　相手の腕を押さえ付けた上での胸や腸への圧迫、引っ掻き、睾丸への打撃と圧迫、拳で殴る、蹴るなどの行為の禁止。
7）　確実に相手を怪我させるであろうことが予測できる状態で相手の腕をねじってはならない。
8）　過度に相手を押さえ付けて窒息させてはならない。
9）　リングの外・観客席・他の競技者が戦っている所に相手を

[37] Yazoğlu, op.cit.,p.80、Güven,Dalaman ve Ayan,op.cit.,pp.326-7

放り投げてはならない。
１０）相手のクスベットを脱がしたり、破いたりしてはならない。故意に行った場合は負けとみなされる。
１１）相手をあまり長い時間押さえ付けたり、持ち上げたりしてはならない。

以上のルールを踏まえた上で、油相撲における代表的な技をいくつか取り上げる[38]。

まず、künde（足枷、足輪）と呼ばれる押さえ込みの技がある。（図１３）Şak kündesi と呼ばれる技は、相手の脚を抱え込んで地面に叩き付ける。Oturak kündesi 相手の脚の付け根に腕をくぐらせ、体重をかけて押さえ込む。Diz kündesi 腰周りを上から押さえ付けて相手のひざ（diz）と両手を地面につかせる。

Kaz kanadı は対面から前のめりになった相手の身体を押さえ込む技であり、絡め取った腕がガチョウ（kaz）の翼（kanat）に見えるためこの名が付いた。Tek çapraz ve budama は相手の脚と自分の脚を絡ませて転ばせる技である。（図１４）

Paça kazık は相手の脚をつかんで持ち上げ、地面に叩き付ける技であり、宙に持ち上げられたすね（paça）が杭（kazık）に見えるためこの名がついた。Kaz kanadı ters paça は背後から腕を絡み取ったまま、座り込んでいる相手のすねを引き寄せ、足を完全に固めてしまう技である。Boyunduruk とは相手のわきの下に腕をくぐらせて、前のめりになった相手の頭部を押さえ込む技である。(図１５）

Sarma'ya Giriş は足首や腰まわりをつかんで相手を地面に引き倒したのち、押さえ込みに入る技である。（図１６）

第四節　クルクプナル Kırkpınar の伝説と油相撲大会

トルコとギリシアの国境に近い都市、エディルネのクルクプナル（図１７）では毎年初夏にかけて、油相撲大会が大々的に行われている。この大会が現在トルコにおいて最大の公式の油相撲大会であり、主に地元であるエディルネやバルケシル、アダパザルやデニズリをはじめとしたトルコ西部～南西部からの都市から多くの選手が集まり[39]、国内外からの観光客の注目を集めている。なお一番高い等級（Başpehlivan）には黄金のベルトと賞金が与えられる。賞金

[38] Yazoğlu, op.cit.,pp.84-90
[39] Yazoğlu, op.cit.,p.170-1

の金額は 1910 年には 9 リラ、1975 年には 15,000 リラであり、現在ではインフレの影響もありドルで 100,000 ドルが優勝者に与えられるのである[40]。

この地での開催については、クルクプナルの地名の由来にもなった次のような伝説がある[41]。

１４世紀半ば、オスマン帝国第二代皇帝オルハンの息子、スレイマン・パシャは多くの若者（kırk[42] yiğit）を率いてヨーロッパへ渡航し、ある日エディルネ（アドリアノープル）近郊のアフルキョイの牧草地に陣を敷いた。当時は戦局が小康状態にあり、陣中でも余興として相撲が楽しまれていたため、血気盛んな兵士達は互いに組み合って試合を始めたが、夜になっても決勝戦の決着がつかず、この二人は一晩中戦い続けた結果、朝には相撲を取ったままの姿勢で互いに力尽きて死んでしまったのである。

仲間の兵士達は彼等の死を悲しみ、二人が相撲を取った場所の近くに生えていたイチジクの木の根元に遺体を埋葬し、エディルネへの攻撃を続けた。翌年、エディルネ征服（1363 年）の後、このイチジクの木の近くから泉（pınar）が湧き出たとされている。以降この土地はクルクプナル（たくさんの（kırk）泉（pınar））と呼ばれるようになり、二人の勇者の死とその相撲に対する熱意をたたえて油相撲大会が開催されるようになったと伝えられる。

クルクプナルの油相撲大会は毎年太陽暦で夏のはじまりにあたる五月六日に合わせて、同時開催された家畜や様々な品物がやり取りされる四日間の大定期市のうち、二日目、三日目、四日目の三日間にかけて開催されてきた[43]。この開催時期に関しては、秋に種を巻いた小麦を春に刈り入れて、その収穫に感謝して相撲を取るものと考えられる。また五月六日はトルコではフドレレズの祭日であり、人々は山や小川にピクニックに出かけ、綱引きや馬とびをして遊ぶ。

この祭日は、トルコ人が中央アジアからアナトリアに進出した１１世紀ころまで広くキリスト教徒に信仰されていた緑や豊穣の聖人、聖ゲオルギウスに由来する。トルコ人が元来遊牧民として持っていた水や緑に対する信仰が聖ゲオルギウスへの信仰のなかに見出された結果、彼と同一視され幸運をもたらす聖者フズルが生まれ、五月六日に行われていたゲオルギウスの祭りをフドレレズの祭りとして

---

[40] Güven,Dalaman ve Ayan,op.cit.,p.328、Yazoğlu, op.cit.,p.173
[41] Güven,Dalaman ve Ayan,op.cit.,p.327
[42] kırk はトルコ語で「40」を意味するが、「たくさん、数が多い」という意味もある。
[43] Güven,Dalaman ve Ayan,op.cit.,p.328

祝うようになったのである[44]。
この祝日に合わせて油相撲の大会が開催される点においても、油相撲がトルコ系遊牧民族の文化と、バルカンのキリスト教徒の文化との融合によって誕生した競技であると考えられる。

おわりに

油相撲、ヤール・ギュレシュはトルコ系の遊牧民族の伝統的な相撲カラクチャック・ギュレシュが、バルカン地方へのトルコ系の人々の定住にともない、エーゲ海地方の油を塗る相撲やパンクラス（パンクラチオン）などの伝統と出会うことによって生まれたトルコ独特のスポーツである。

草原のリングの上で互いの身体のみを武器とし、家畜の皮で縫われたズボンを履き、競技の際には祈祷師が神への祈りを捧げ、自身の勇猛さを誇示するパフォーマンスをするという点においては、油相撲は非常に遊牧民的なスポーツである。
しかし同時に、古代ギリシア時代からの伝統である油を塗るという行為によって、互いの身体をつかんだり投げたりするのに強靭な腕力だけでなくより高度なテクニックが必要とされるようになったことで、さらなる発展を遂げたスポーツである。
また古代オリンピックで正式な競技であった、相手をより美しい形で投げる相撲や、力で相手に負けを認めさせるパンクラチオンなどのスタイルも取り入れられた競技であり、時代の辺遷にともないより面白く、より複雑に洗練されたスポーツに変貌を遂げた結果、オスマン朝や現代に至るまでトルコ人に愛される国民的スポーツとしての地位を築くことが出来たのである。

このように二つのスポーツの伝統の融合により、トルコの人々は彼ら独自の、より高度なひとつのスポーツ文化を得ることができたのである。また現在もその伝統が、トルコの人々によって引き継がれ、保護され愛好され、クルクプナルでの油相撲大会という形で国内外で人気を博していることは、非常に歴史的価値があるものと考えられる。

---

[44] 地中海学会編、『地中海の暦と祭り』、刀水書房、2002年、p.120-1

参考文献

Alper Yazoğlu,Balkanlarda Türk Yağlı güreşleri Kırkpınar 1,n.d.
Özbay Güven,"Türklerde Spor Kültürü",
Atatürk kültür,dil ve tatih yüksek kurumu Atatürk kültür merkezi yayınlar sayı:57,Ankara,1992
Özbay Güven,Osman Dalaman ve Dursun Ayan,"Osmanlı Devletin'de Güreşin Kurumlaşması Üzerıne Bazı Düşünceler",
Alaadin Akoz bayram Ürekli Ruhi Özcan(haz.)
Uluslararaı Kuruluşunun 100 Yıl Döneminde Bütün Yönleriyle Osmanlı Devleti Kongresi,Konya,2000
Âtıf Kahraman,Osmanlı Devleti'nde Spor,Ankara,1995
Dünden Bugüne İstanbul Ansiklopedesi,clit3,İstanbul,1994
Narrative of travels in Europe, Asia, and Africa, in the seventeenth century, by Evliya Efendi, translated by Joseph von Hammer, London, 1834,rep.1968

寒川恒夫、『相撲の人類学』、大修館書店、1995年
佐藤次高、清水宏祐、八尾師誠、三浦徹、『イスラム世界のヤクザ－歴史を生きる任侠と無頼－』、第三書館、1994年
E.N.ガーディナー著、岸野雄三訳、『ギリシアの運動競技』、プレスギムナスチカ、1981年
テレーズ・ビタール著、鈴木董監修、『オスマン帝国の栄光』、創元社、1995年
地中海学会編、『地中海の暦と祭り』、刀水書房、2002年
新井政美、『トルコ近現代史』、みすず書房、2001年

『最新スポーツ大事典』正編、大修館書店、1987年
『日本大百科全書』第4巻、第22巻、第24巻、小学館、1988年
『日本大百科全書』第13巻、小学館、1987年
『日本大百科全書』第2巻、小学館、1985年
『イスラム事典』1982年、平凡社

参考資料

ホームページ "Turkish Wrestling"
http://www.ne.jp/asahi/bayside/yokohama/
Ottoman Empire in Miniatures, Ankara, n.d.
トルコ観光ガイドブック（日本語版）1999年、トルコ政府観光局